

# JFM だより

Vol. 16

※JFMとは、  
Japan  
Finance Organization  
for Municipalitiesの略称です。

## INDEX

- JFMトピックス … P1
- 融資の実 兵庫県芦屋市 市立芦屋病院 … P7
- がんばる公営競技 四日市けいりん … P11
- 自治体ファイナンスよもやま話 … P13
- 地方支援ダイアリー … P15
- 基金運用ひとくちメモ … P17
- JFM人事交流日記 … P18
- JFMからのお知らせ … P19
- 私たちがJFM債買ってます！ … P19



今号の表紙

## 兵庫県芦屋市 市立芦屋病院





Feature1

兵庫県芦屋市 市立芦屋病院



# 市民に愛され、信頼される 地域の中核病院を目指して

開業以来63年、地域に根差す医療機関としての役割を担ってきた市立芦屋病院。施設の老朽化とともに、経営状況が悪化したことから、平成21年度から5年間の「市立芦屋病院改革プラン」を策定し、抜本的な改革を行いました。市民にとって快適な病院であるために、また、健全な経営による質の高い医療を提供するために、新病棟建設をはじめとする取組みを進めてきました。

外来受付・  
待合室

レストラン



リハビリルーム



特別個室

## 健全な経営のための 本格的な改革へ

兵

兵庫県芦屋市は、北に六甲山系、南に大阪湾を臨み、海に向かって緩やかに傾斜する地形が美しい景観を生み出しています。瀟洒で成熟した住宅街が広がる芦屋市は、国際文化住宅都市にも指定されており、市の山手は谷崎潤一郎の小説「細雪」の舞台になったことでも知られています。

市立芦屋病院は、昭和27年に内科、外科、放射線科の3科により発足。「戦後間もない当時は、結核を患う方が多く、緑豊かで風光明媚な高台に建つ当院は、治療や療養をする環境としても適していたようです。」(市立芦屋病院 佐治文隆事業管理者/「」内のコメント以下同)

開業当初の病棟は木造で、その後傾斜地に増改築を繰り返した結果、動線が複雑になり患者さんに不便を強いていました。加えて建物の老朽化の問題や、平成10年の耐震診断の結果により、耐震補強か建替えかという選択を迫られました。

また、平成20年度には収支不足を補うための市からの長期借入金が8億円となり、これ以上経営の低迷が続けば、よりよい医療を市民に提供できなくなるという危機感から、平成21年度から5年間の「市立芦屋病院改革プラン」を策定。地方公営企業法の全部適用へ運営形態を見直し、事業管理者を経営責任者として、経営と施設を同時に改善する本格的な改革に乗り出します。「別の場所への移転という選択肢もありましたが、患者さんにとってここが良好な環境であるという市民の声を優先し、現所在地での病棟の新築、外来・管理棟の改築を決断しました。」

芦屋市街から神戸港まで一望できる屋上からの眺望





太陽光発電パネル



人間ドックセンター



色分けされたフロアの写真



消化器センター・内視鏡室

## 利用者の快適を考えた新たな病院

**生** まれ変わった病院は、清潔かつ緑を活かした「グリーン&グリーン」をコンセプトに、太陽光発電やガス・コジェネレーションなどクリーンエネルギーを採用し、手術室、薬剤室、病室の一部では高機能フィルターで病原菌の侵入を防ぎ、清潔な環境を実現しています。また、複雑だった動線も分かりやすく改善し、1階から4階の各階の廊下などは、「海」、「街」、「山」、「空」をイメージし、それぞれ濃紺、ピンク、緑、青で色分けし、どこの階にいるのか分かるように配慮されています。さらに、隣接する公園と病院の敷地を一体化し、利用者のみならず、地域の人々も気軽に憩える緑地

を設けています。

新病棟では、許可病床数を272床から199床に減らし、全体の63%を個室にしました。これはプライバシーを重視し、患者さんに少しでも快適に過ごしてもらいたいという考えと、感染症を防ぐという意図があります。「決して大規模な病院ではありませんが、市民の方に、明るくてきれいで快適な病院に変わった、利用しやすくなったと思っていただければ幸いです。」

さらに、市民病院も病気を治すことだけでなく、患者さんの精神的苦痛を和らげる医療や予防医療にも力を入れなければならないという考えから「緩和ケア病棟」や「消化器センター」、「人間ドックセンター」を新たに設置しました。人間ドックは国民健康保険加入の芦屋市民を対象に市から検査料の半額が助成され、市民が受診しやすいようになっています。

## 医療の質を上げるための取組み

# 経

営の改善においては、何よりも医療の質を上げることが必要であると考え、医師をはじめ、看護師、薬剤師、臨床検査技師など病院の核となる人材について、大学病院などの協力を得ながら優秀な人材を招聘しました。また、より専門的で高度な知識を持った専門看護師や認定看護師を積極的に増やすことを目指し、勤務しながらの大学通学や通信教育の受講等、資格を得るための病院側のサポートを充実させました。「医療の質を上げる鍵はやはり“人”であるというのは改革当初からの考えです。」

また、職員全員の職能向上を図るため、半期毎に各部署が目標を設定し、その達成度が部署毎に評価され賞与の参考にされるなど、職員のやりがいを高める方法を取り入れています。さらに、毎朝、院長、副院長、診療局長、事務局長、看護部長による経営会議を開き、そこで議題になったことや決議された事項はすぐに対応、実行するという迅速な運営により、小さな問題を小さなうちに解決し、大きな事故を未然に防ぐようにしています。

これら様々な経営努力や施設の改善により、平成20年度には68%であった病床稼働率が平成25年度には84%に向上。市からの長期借入金もなくなり、現金ベースでの黒字化を実現しました。

## 地域との交流や 広報活動も積極的に



あしやホスピタルフェスタ

# 市

立芦屋病院では、市民に向けての健康増進の啓発や広報活動も積極的に展開しています。毎月様々なテーマを設けての「公開講座」をはじめ、「健康教室」、「がんフォーラム」を市内の施設で実施しています。

また、年に1回の「あしやホスピタルフェスタ」は大学のオープンキャンパスならぬオープンホスピタル。「もともとは新しくなった病院を多くの人に知ってもらおうという考えから始まった催しです。病院を会場として、血管年齢や骨密度などの測定ができたり、お子さんに医師や看護師の疑似体験をしてもらったり、腹腔鏡手術の練習をする機械を使ってお菓子のつかみ取りをやったりと、様々に趣向を凝らして皆さんに楽しんでいただいています。」

院内コンサート



## 診療所とのネットワーク化を推進

# 地

地域の医療を担う機関として市立芦屋病院が強く意識するのは「医療の地産地消」と「地域完結型医療」です。近隣の医療機関と連携を深め、診療所から患者さんを受け入れたり、逆に診療所を紹介したりすることで、病院と診療所が役割を分担し、地域の医療機関全体でひとつの病院のような機能を持つという考え方です。それは、患者さんが病状に応じて馴染みある地域や自宅での療養を可能とし、クオリティ・オブ・ライフ(=質の高い暮らし)を維持できることに繋がります。市立芦屋病院では地域連携室を設け、地元の提携医と独自のITネットワーク化を実現し、電子カルテやCTスキャン等の医療情報を共有して、診察や治療に役立てています。

「何かあったら芦屋病院に行けば頼りになる、あそこの先生に診てもらいたいと言われるような地域の中核病院を目指し、質の高い医療、看護を目指していきたいと思います。」